

薬の伝言板

～薬の相互作用について～



No.315 2024年2月
丸子中央病院 薬局

薬の相互作用について、ご存知ですか？医師や薬剤師などから「薬の飲み合わせ」、「薬の相性」といった言葉で聞いたことがあるかもしれませんね。では、具体的にはどんなことが体の中でおきたり、どんな影響があったりするのでしょうか。いろいろな種類があり、もちろん薬の作用の変化も様々ですが、今回は飲み薬の相互作用について、少しだけ確認しましょう。

相互作用とは？

2種類以上の薬を使用したときに、その薬の種類によって、作用が強くなり、逆に効果が弱くなり、場合によっては副作用が出やすくなりたりすることを言います。相互作用は、薬と一緒に使用するだけでなく、食品や健康食品、サプリメントとの間でも起きることがあります。

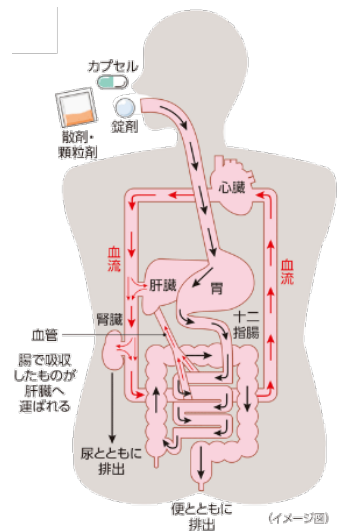


薬を飲んでから体の外に出るまで

薬が口から体内に入って効果を出し、そして体の外に出るまでの過程は大きく「吸収」「分布」「代謝」「排泄」という4段階に分けられます。

口から体の中に入った薬は、胃や小腸、肝臓、血液、腎臓と体内を循環し、最後は尿（一部は便）となって体内から消えていくのです。

この体内を通る様々な過程の中で、「相互作用」はどこでも起きる可能性があります。



◎ 薬が「代謝」される過程での相互作用

主に薬は肝臓で代謝（分解）されます。この代謝を担っているのが代謝酵素と呼ばれていて、多くの薬がこの酵素を経由するため、この過程での相互作用が最も多いとされています。

例えば… マクロライド系抗菌薬（クラリスロマイシン） — 不眠症治療薬（スボレキサント）

この場合、クラリスロマイシンとスボレキサントの2つの薬の併用は一般的に禁忌とされています。クラリスロマイシンがスボレキサントの代謝を邪魔してしまうことで、スボレキサントの分解が遅れ、150%以上効果が上がるとされ、結果として副作用が強くなり、眠気や集中力の低下などが残り、日常生活に影響を及ぼしてしまう危険性が強い、とされています。

◎ 薬が「吸収」される過程での相互作用

薬が体内に吸収されるときに、吸収率や吸収速度が影響を受けて、薬が吸収されやすくなったり、逆に吸収されにくくなったりする相互作用です。



例えば…

ニューキノロン系抗菌薬(レボフロキサシンなど) — 金属イオンが含まれる薬(酸化マグネシウムなど)

この場合の具体的な例として、酸化マグネシウムと同時に飲むとレボフロキサシンとくっついて吸収されにくくなり、レボフロキサシンの吸収率が20%程度下がるとされます。細菌感染症の治療をするためのレボフロキサシンの吸収率が少しでも下がることは問題で、体内での濃度が上がらずに有効的な治療ができなくなり、結果として感染症を治すことができなくなってしまうことになります。

◎ 薬と食品の相互作用

薬と食品の間でも相互作用に気をつける必要があります。

例えば…



テトラサイクリン系抗菌薬(ミノサイクリン) — 牛乳・乳製品

これも薬が「吸収」される過程に関係しています。ミノサイクリンを、カルシウムが豊富に含まれる牛乳で飲むと、ミノサイクリンの吸収率が30%程度下がるとされます。

抗凝固薬(ワルファリン) — 納豆・青汁

血栓ができるのを防ぐ作用のあるワルファリンですが、この過程ではビタミンKのはたらきを抑えることで血液を固まりにくくしています。納豆にはビタミンKが多く含まれているため、ワルファリンの作用を弱めてしまいます。ただし血液を固まりにくくする全ての薬がビタミンKと関係しているわけではなく、ワルファリン以外の抗凝固薬は納豆や青汁を食べても問題ありません。

薬の相互作用は、全てが分かっているわけではありませんが、場合によっては対応が必要なケースもあります。薬の併用が始まる時の他にも、薬を減らす時にも注意が必要です。

複数の医療機関や診療科から薬が処方される際には、現在使用中の薬を医師や薬剤師へ必ず伝えてください。他の薬への変更、もしくは相互作用を回避できる方法があることがあります。

ご自身で現在使用している薬を把握する方法の一つに、お薬手帳の活用があります。

活用の際、相互作用の早めの確認を可能とするためにも、医療機関ごとの手帳とせず一冊に全てを記録することは、とても重要なことなのです。

